

国語

問題冊子

注意事項

- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 本冊子は十一ページであり、解答用紙は三枚である。落丁・乱丁・印刷不鮮明の箇所などがあつたら、
ただちに試験監督者に申し出ること。
- 三 受験番号は、三枚の解答用紙のそれぞれの指定箇所に必ず記入すること。
- 四 解答は、読みやすい正確な字で記入すること。
- 五 解答用紙は持ち帰らないこと。
- 六 問題冊子は持ち帰ること。
- 七 大問ごとに、満点に対する配点の比率(%)を表示してある。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、設問の都合で、原文の一部を省略・改変した箇所があります。(配点比率55%)

コミュニケーションの美的側面

活字やラジオ、テレビ——最近ではインターネット——などの「メディア」に媒介されて「世論」が形成される近代市民社会とは異なって、古代ギリシアの「ポリス」での「言論活動」は、原則的に「市民」全員が同じ空間(広場)に居合わせ、全員の姿が見える範囲内で行なわれた。「公的領域」というのは、抽象的・理念的に存在するだけでなく、現実¹に一定の空間・時間を占めていた。語り手は、文字通り「公衆の面前」で語るようになるわけである。従って各人は、身振り手振りを交えながら、他の人々の知性^aだけではなく感性にも訴えかけ、うまく自分の文脈に誘い込めるような壮麗な「物語」を展開しようとする。高度に

A 化されて個人プレーの余地が少なくなっている近代の議会よりも、演技的な要素がかなり強かった、と想像できる。

さらに言えば、古代ポリスにおいて発展した悲劇・喜劇は、近代の演劇のように閉じられた空間の中で上演されるわけではなく、野外で、多くの「公衆」の前で、しかもこの「公衆」をもパフォーマン스에巻き込む形で行なわれたことが知られている。そして、そこで演じられる主要なテーマは、ポリスの成り立ちをめぐる「歴史」物語^bである。つまり、(仮面を被った)俳優/公衆/一般市民の間の力^aキネが低く、ポリスの公的領域を構成するほぼ全員が共同で、古より^bデモンショウされてきた「神話」物語^c myths を演じる構図になっていたわけである。

このように考えれば、ポリスの市民にとって、「演劇」の「公衆」役者^dになることと、「言論活動」の「公衆」演説者^eになることは、重なり合っていたと言える。「演劇」に参加することが、そのまま政治的「言論」の訓練になっていたわけである。ポリスは、演劇をモデルとしながら、人間的なコミュニケーションの技法を相互に鍛練し合う、巨大な工房の様相を呈していたのである。

このように、「演劇」において特定の「役」になり切るための訓練が、皆の前で巧みに語る訓練につながるという点でも、ポリスは「学校」に例えることができる。西欧的な教育制度の影響を受けている「我々」は、「学校」で、ホーム・ルーム活動をを通して討論の練習をすると共に、学芸会でお芝居などのパフォーマンスを通して身体的な表現力を身に付ける。学芸会で台詞を言ったり、国語で教科書を朗読したりすることは、ホーム・ルームでうまく「語る」ための準備にもなっているのである。当然、後者から前者へのフィードバックもある。学校教育の中では、ポリスと同様に、² 言論的要素と美的要素が相互に絡まり合っている。

ただし、「学校」と「ポリス」では、決定的に異なる点があることにも留意しておこう。それは、「学校」の児童・生徒が、大人になるための訓練を

特定の期間だけ受けるのに対して、古代のポリスの「演劇—言論」には、全市民が永続的に参加し続けることである。近代市民は大人になれば、しよっちゅう公的な「演劇」に参加するわけにはいかないし、いつまでも延々と時間をかけて自らの弁舌の巧みさを他人の前で披露するわけにもいかない。仮に時間があったとしても、一緒に演じ、語ってくれる仲間や、そのための場を確保するのは困難である。「ポリス」のように数万人の市民が絶えず参加できる、大がかりな「演劇—言論」システムは歴史上極めて稀である。その意味でアーレントの言うように、ポリスの言論—演劇で培われた「人間性」は、ポリス的な条件を欠いた世界にまで拡張することは困難なのである。

それに加えて「演技」的なものである以上、その共同体で歴史的に形成されてきたテーマや技法にかなり特殊性がある。言わば、伝統芸能的な面があるわけである。別の共同体で身に付けた技法がそのまま通用するとは限らない。ギリシアのポリスでは、相手を効果的に説得するための技法として、「弁論術（レトリック）」が発展した。この技術には、純粹に論理的に議論を進めていくだけではなく、相手の目の前で身振りを交えて情熱的に——あるいは冷静な装いで——演技してみせたり、美しい言葉や巧みな言い回しを選ぶことなどで、自分が語ろうとする「物語」の筋に相手を巻き込んでしまうテクニクも含まれる。

そうしたテクニクは、かなりローカルで、B 化しにくいはずであるが、西洋的な「人間性」概念には、そうした技法があらかじめ組み込まれていたのである。

「人間性」の技法

弁論術・修辞学をも含めた伝統的な「語り」の技法を、「人間性」の本質的な部分と考えるのは、アーレントの専売特許ではない。「人間性」を意味する〈humanity〉の語源になったラテン語の〈フマニタス humanitas〉は、古代・中世のヨーロッパの知識人にとって、ギリシア語やラテン語の美しい文体で書かれた「古典」を讀解し、その著者のスウコウなる「精神」から学ぶことを意味していた。完成された、円満な人格の在り方としての「フマニタス」を、最初に明確に定義したキケロは、周知のように古代ローマにおける弁論術の完成者である。彼にとって「フマニタス」とは、歴史学・法学・哲学・修辞学などの学問を「教養」として身に付けていることである。

現在「総合」大学 university で、社会科学を除く伝統的な文科系の諸科目、哲学、文学、歴史学、地理学などを総称して、「人文科学 humanity」と呼ぶのも、そうした「フマニタス」的な考え方の名残である。これらを基礎的な「教養」として習得することで、豊かな「人間性」が形成されると想定されているわけである。「教養」科目として、語学、哲学、歴史などの「人文」系の授業が大きな比重を占めるのは、それらが、「人間性」の基礎

を形成するうえで「不可欠」だからである。

従って、大学³の入学式の式辞などで、学長や学部長が、「学問を通して、単に知識を詰め込むだけでなく、豊かな人格を形成し……」と、どう考えても歯の浮くような綺麗事を滔々と述べ立てるのも、西欧の「人間性Ⅱ教養」の伝統を念頭におけば、必ずしも根拠のないことではない。日本は、もともとそうした伝統を共有していなかったため、戦後の大学教育で、そうした考えがなかなか定着しなかった。しかもそれを理解していない文部カン^eリヨウや大学幹部の、「役に立たない教養科目はいらない」という短絡的な発想で、教養部廃止が断行されたため、現在では、「教養」というのは余計なもの、というのが学生の「常識」になっている。筆者も、いわゆる「教養科目」が、「人間性」形成に役立つているなどとは思わないが、それは、「科目」自体の問題であるというよりも、一定の「教養」概念を持たない日本文化や、それを必要と思わない学生や教師の体質の問題であろう。

無論、現代の西欧諸国の大学生でも、「教養科目Ⅱ自由な技芸 *liberal arts*」によつて「人格」を磨くなどと本気で考えている者はごく少数だろうが、そうした教育の伝統がまだ完全には途絶えていないので、少なくとも全くの空論ではない。

「ヒューマニズム」の根源

「フマニタスⅡ人間性」という概念は、もともと人間の「自然な本性」ではなく、人為的に形成された技法の総体を指していたが、これと不可分の関係にある「ヒューマニズム」あるいは「ヒューマニスト」といった言葉も、「フマニタスⅡ教養」的なものと強く結び付いてきた。西欧の歴史において、最初に「ヒューマニスト」と呼ばれたのは、イタリア・ルネサンス期の *umanista* たちであり、彼らの営みが「ヒューマニズム *umanesimo*」である。

日本語で「ルネサンスのヒューマニスト」という言い方をすれば、どうしても「様々な社会的制約を脱して、人間の自然な生の楽しみを開放した自由人」というイメージが浮かんでくる。ボツカチオの『デカメロン』に出てくるような、性的タブーを破つて「本音で生きる人間」を指しているような響きがある。専門家の中にも、教科書でそのような説明をする人がいるので、一般読者が、ヒューマニストⅡ「現代でも通じそうな八方破れな自由奔放人」と理解するのも無理はない。

⁴ そうした通俗的理解は別に間違っているわけではないが、そこで肝心な事が忘れられがちになる。「ルネサンス *renaissance*」は、「再生」もしくは「復興」を意味するフランス語——イタリア語では *rinascimento*）——であるが、問題は何の「再生」かということである。当然、「人間の再生」というのが模範回答だろう。しかし、それだけでは、何のことだかよく分からない。「人間の再生」というからには、「人間」の本来の姿がそれまで抑圧

され、見えなくなっていたが、ある人々の努力によって再発見・創造されるに至った、ということが含意されているはずである。では、どのような「人間」観が、何によって抑圧されていたのだろうか？

「何によって」なのかは、大抵、教科書に書かれている。キリスト教会によって支配されていた「中世暗黒時代」によってである。西洋の「中世」が本場に「暗黒」であったかどうかは筆者にはよく分からないが、少なくとも、「神」が万物の中心に置かれたので、「人間」の出番が少なくなったのは確かだろう。キリスト教の教義では、現存する人間はダラクして神から遠ざかった人間であり、教会の導きがなければ、正しい道を歩めない弱い存在であった。そうした「弱い人間」観を脱して、「中世」以前の、「生き生きした、強い人間」を復活させようとする運動が「ルネサンス」であり、失われてしまった「人間」像を探求したのが、「ヒューマニスト」たちである。

その場合の、「生き生きした人間」とは、⁵キケロ的な「フマニタス」を豊かに身に付けた人間である。「ヒューマニスト」とは、古代の「フマニタス」に関する文献的研究を通して、真の「人間性」を探求しようとする「人文主義者」もしくは「人文学者」のことだったのである。ペトルルカ、ボツカチオ、ダンテ等も、「古典」⁶文献を涉猟し、古代のラテン語の文法を研究する中で、自らのスタイルを確立した。彼らにとって「人間性」のモデルは、書かれたもの（エクリチュール）を通してしか知ることのできないギリシア・ローマ世界にあったのである。

近代人は、「ルネサンスのヒューマニスト」たちが（再）発見した「人間」を、仮面を脱いだ全くなまの野性の人だと考えがちだが、それは、一八世紀以降の「自然人」観のバイアスを通して、「人間」をイメージしているからである。既に見たように、近代人にとっては、理性の働きを知らない「自然人」が理想だった。しかし、ルネサンスのヒューマニストにとっては、「古代」という媒介なしに「人間性」を C することは考えられなかった。⁷「ヒューマニズム」とは、「生き生きした古代」のエクリチュールを掘り起こすことを通して、それまで埋没していた「人間性」を生き生きと復活させようとする営みだったのである。

こうした「フマニタス」をキバンとする「ヒューマニズム」は、必ずしも「教養」のあるわけではない一般「市民」たちから構成される近代「市民社会」の拡張プロセスの中で次第に薄まっていった。「古典」から豊かな「人間性」を読み取れるのは、ごく一部のエリートだけに限定されていたので、市民すべてにとつての共通の「理想」とするには無理があったわけである。代わって、万人に自然に与えられているはずの「自由と平等」の実現を図ろうとする、人道主義的な意味合いの「ヒューマニズム」が台頭してくる。

(注)

アーレント：ハンナ・アーレント（一九〇六～一九七五）。哲学者。古代ギリシアのポリスの言論空間について深い考察を加えた。

問一 傍線部 a～j について、カタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで記しなさい。

問二 空欄 A、B のそれぞれに入る最も適切な言葉を選び、番号で答えなさい。

- | | | | |
|------|------|------|------|
| ① 義務 | ② 個別 | ③ 娯楽 | ④ 制度 |
| ⑤ 先鋭 | ⑥ 大衆 | ⑦ 普遍 | |

問三 傍線部 1 「古代ポリスにおいて発展した悲劇・喜劇」とありますが、その最も際立った特徴を本文に即して簡潔に説明しなさい。

問四 傍線部 2 「美的要素」とありますが、それは何を指しますか。具体的に説明しなさい。

問五 傍線部 3 について、学問を通して人格を形成するという大学の主張が、なぜそれなりの根拠を持ちつつも、違和感を感じてしまうのですか。説明しなさい。

問六 傍線部 4 「そうした通俗的理解は別に間違っているわけではない」とありますが、どのような点において「間違っているわけではない」のでしょうか。説明しなさい。

問七 傍線部 5 「キケロ的な「フマニタス」を豊かに身に付けた人間」とありますが、それはどのような人間像のことですか。説明しなさい。

問八 傍線部 6 「文献を涉獵（する）」とありますが、どのような意味ですか。簡潔に答えなさい。

問九 空欄Cに入る最も適切な言葉を選び、番号で答えなさい。

① 記述

② 思考

③ 表現

④ 表象

⑤ 論究

問十 傍線部7について、古代のエクリチュールから人間性を復活させることは、市民社会の理念においてはどのような限界があつたのですか。本文に即して説明しなさい。

次の文章は平通盛と小宰相との馴れ初めを語る『平家物語』の一節です。よく読んで後の問いに答えなさい。なお、設問の都合で一部本文を省略・改変した箇所があります。(配点比率30%)

この女房と申すは、頭の刑部卿憲方の娘、上西門院の女房、宮中一の美人、名をば小宰相殿とぞ申しける。この女房十六と申しし安元の春のころ、女院、法勝寺へ花見の御幸ありしに、通盛の卿、その時はいまだ中宮の亮にて供奉せられたりけるが、この女房をただ一目見て、あはれと思ひそめけるより、その面影のみ身にひしとたちそひて、忘るるひまもなかりければ、初めは歌をよみ、文をつくし給へども、玉章の数のみつもりて、取り入れ給ふこともなし。すでに三年になりしかば、通盛の卿、いまをかぎりの文を書いて、小宰相殿のもとへつかはす。折ふしとりつたへたる女房にもあはずして、使ひむなく帰りけるみちにて、小宰相殿は折ふし我が里より御所へぞ参り給ひける。使ひ、むなしう帰り参らんことの本意なさに、御車のそばをつと走り通るやうにて、通盛の卿の文を小宰相殿の車の簾の中へぞ投げ入れける。供の者どもに問ひ給へば、「知らず」と申す。さてこの文をあけて見給へば、通盛の卿の文にてぞありける。車に置くべきやうもなし、大路に捨てんもさすがにて、袴の腰に挟みつつ、御所へぞ参り給ひける。さて宮仕へ給ふほどに、所しもこそおほけれ、御前に文を落とされたり。女院、これを御覧じて、急ぎ取らせおはし、御衣の御袂にひきかくさせ給ひて、「めづらしきものをこそ求めたれ。この主は誰なるらん」とおほせければ、御前の女房たち、よろづの神仏にかけて、「知らず」とのみぞ申しあはれける。そのなかに小宰相殿は、顔うちあかめて物も申されず。女院も通盛の卿の申すとはかねてより知るしめされたりければ、さてこの文をあけて御覧するに、妓炉のけぶりのにほひ殊になつかしく、筆のたてども世の常ならず。「あまりに人の心強きも、なかなか今はうれしくて」³ なんと、こまごまと書いて、奥には一首の歌ぞありける。

わが恋は細谷川の丸木橋ふみ返されて濡るる袖かな

女院、「これは逢はぬを恨みたる文や。あまりに人の心強きも、なかなかあたとなるものを。これはいかにも返しあるべきぞ」とて、かたじけなくも、御硯召し寄せて、みづから御返事あそばされけり。

ただたのめ細谷川の丸木橋ふみ返しては落ちざらめやは

胸のうちの思ひは富士のけぶりにあらはれ、袖のうへの涙は清見が関の波なれや。三位、この女房を給はつて、たがひに心ざし浅からず。されば、⁴ 西海の旅の空、舟のうち、波の上の住まひまでも引き具して、つひに同じみちへぞおもむかれける。

(注)

上西門院…鳥羽天皇の第二皇女、統子。後白河天皇の准母。

小宰相殿…藏人頭・刑部卿などを歴任した藤原憲方の第二女。

安元…高倉天皇の治世。一一七五～一一七七年。

法勝寺…京都市左京区岡崎にあつた白河天皇の御願寺。六勝寺の一つ。

通盛…平教盛の長男。越前の三位と呼ばれた。一の谷の戦いで討ち死にした。

中宮の亮…三宮（皇后・皇太后・太皇太后）の文書事務や庶務を司る中宮職の次官。

妓炉のけぶりのにほひ…妓女（宮廷の舞女）が香炉で焚く麝香の煙の匂い。ここは手紙に焚き染めた香のかおり。

あたとなる…「あた」は恨み、遺恨。ここは不幸の種になるの意。

胸のうちの思ひはく波なれや…ここは『詞花集』恋上、平祐拳の「胸は富士袖は清見が関なれや煙も波も立たぬ日ぞなき」という歌を踏まえる。

清見が関…静岡市清水区興津にあつた古関。

問一 傍線部ア～エの意味を記しなさい。

問二 傍線部1「いまをかぎりの文」とはどのようなものか、通盛の思いに即してわかりやすく説明しなさい。

問三 傍線部2を的確に現代語訳しなさい。

問四 傍線部3について、

① 「あまりに人の心強きも」とあるのは、誰のどのような様子（態度）について言ったものか、わかりやすく説明しなさい。

② 「なかなか今はうれしくて」とあるが、通盛がそのように思うのはどうしてか、わかりやすく説明しなさい。

問五 「わが恋は」の歌の「ふみ返されて濡るる袖かな」には、通盛のどのような状態が言い表されているか、わかりやすく説明しなさい。

問六 傍線部4の掛詞と縁語を用いた表現について、簡潔に説明しなさい。

問七 『平家物語』と同じジャンルに属する作品の中から一つ選び、記号で答えなさい。

a 宇治拾遺物語

b 海道記

c 雨月物語

d 大和物語

e 太平記

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合で送り仮名や返り点を省略した箇所があります。(配点比率15%)

逢蒙^{ほうもう}学^フ射^ヲ於^レ羿^{げい}。尽^{クシテ}羿^ニ之道^ヲ。思^{ヘラク}天下^{ただ}惟^{ノミ}羿^ヲ為^レ愈^レ己^ニ。於^レ是^ニ殺^{セリ}羿^ヲ。孟子^ニ曰^ク「是

亦^モ羿^ニ有^レ罪^{ナシ}焉^ト。」公明儀^ニ曰^ク「宜^{ほとん}若^{シト}無^キ罪^{ナシ}焉^ト。」曰^ク「薄^キ乎^ノ云^ハ爾^ニ、惡^{クンソ}得^レ無^キ罪^{ナシ}。鄭人^ニ使^ム

子濯孺子^シ。侵^レ衛^ヲ。衛使^ム庾公之斯^{こうし}追^ハ之^ヲ。子濯孺子^ニ曰^ク「今日^ニ我^ガ疾^{やまひ}作^{おこリ}、不^レ可^ク以^テ

執^ス弓^ヲ。吾^ハ死^{ナシ}矣^ト夫^{ナド}。」問^{ヒテ}其^ノ僕^ニ曰^ク「追^フ我^ヲ者^ハ誰^ト也^ト。」其^ノ僕^ニ曰^ク「庾公之斯^ト也^ト。」曰^ク「吾^ハ生^{キント}

矣^ト。」其^ノ僕^ニ曰^ク「庾公之斯^ハ衛^ノ之^ノ善^{クスル}射^ヲ者^也。夫子^ニ曰^ク「吾^ハ生^{キント}、何^{ヒソ}謂^フ也^ト。」曰^ク「庾公之斯^ハ

学^ビ射^ヲ於^レ尹公之他^{たに}、尹公之他^ハ学^フ射^ヲ於^レ我^ニ。夫^カ尹公之他^ハ端^{ただシキ}人^也。其^ノ取^{ルコト}友^ヲ必^ズ

端^{シカラント}矣^ト。」庾公之斯^ニ至^{リテ}曰^ク「夫子^ニ何^{レソ}為^レ不^レ執^レ弓^ヲ。」曰^ク「今日^ニ我^ガ疾^{やまひ}作^リ、不^レ可^ク以^テ執^ス弓^ヲ。」

曰^ク「小人^ハ学^ビ射^ヲ於^レ尹公之他^に、尹公之他^ハ学^フ射^ヲ於^レ夫子^ニ。我^ハ不^レ忍^ビ以^テ夫子^ノ之^ノ道^ヲ反^{ツテ}害^{スルニ}

夫子^上。雖^レ然^{リト}、今日^ニ之^ノ事^ハ、君^ノ事^也。我^ハ不^レ敢^ト廢^セ。」抽^{ぬキ}矢^ヲ叩^{たたキテ}輪^ニ、去^リ其^ノ金^ヲ、発^{はなチテ}乘^ニ矢^ヲ而^{シテ}

後^ニ反^レ。」

〔孟子〕より

(注)

逢蒙…羿の家臣。

羿…古の伝説上の弓の名人。この話では夏王朝の有窮国の君主。

公明儀…魯の賢人。

鄭…春秋時代の国名。

衛…春秋時代の国名。

尹公之他…人名。

金…矢じり。

乘矢…四本の矢。

問一 二重傍線部 a く c の読みを、送り仮名も含めて、平仮名で記しなさい。仮名遣いは問いません。

問二 傍線部 1 「不可以執弓」を「もってゆみをとるべからず」の読みに従って返り点をつけなさい。送り仮名は必要ありません。

問三 子濯孺子と庾公之斯の二人はどのような関係にあるのか説明しなさい。

問四 傍線部 2 「我不忍以夫子之道、反害夫子」を現代語訳しなさい。

問五 波線部「悪得無罪」について、孟子は何故殺された羿にも罪があると考えたのか、孟子が語った逸話を踏まえて説明しなさい。